

にんげんをかえず、けやきの詩人

佐相憲一

人のような詩世界をこうしてご案内することができて、  
本當にうれしく光榮に思っている。

では、彼の人間性をよく表す作品を引用しよう。

詩人・山岡和範氏をご存じだろうか。

「詩人会議」や「戦争と平和を考える詩の会」、昔の「日曜」の会に縁のある方々、あるいはいわゆる民主的諸運動のベテランの方々なら、この名前に敬意と親しみを感じるだろう。「いまさら言うまでもない、有名人だよ」と。

そんな風に親しまれてきた詩人であるが、現代詩一般の世界には縁の薄い存在であったので、広く文学的に位置づけられる機会がなかった、いわば「埋もれた宝」「知る人ぞ知る人」であったかもしれない。また、若い人たちの多くはこの詩人を知らないであろう。

その意味でも、今回の刊行によつて、貴重な詩世界が広く知られ、現代と後世にきちんと刻まれることは大切なことである。

かく言う私も、敬愛する先達詩人の戦後社会の生き証

この詩は作者三十二歳の年に刊行された第二詩集『けやきの絵』の一篇だが、二十五歳の第一詩集『貧者の求愛』から七十七歳の第十二詩集『笑生ちゃん』まで、年代で見ると一九五〇年代から今日まで、この詩人がずっと書き続けてきたものの深部が象徴的に表されている作品と言えるのではないか。

五月のさわやかなけやきの樹。その下で子どもたちが遊んだり、休んだりする光景も浮かぶ。新緑はそれ自体が人間のこどものように伸びやかな生命の力を感じさせてくれる。

詩人はそこにやさしい希望をたくして佇んでいる。彼は小学校の教師である。こども時代に戦争を体験し、戦後の社会を自ら築いている教師である。時に郷里の広島の小さな島の自然を思い、東京の暮らしでも教え子たちに自然の豊かさを感じてもらいたいと共に外に出る、民主主義と平和の教師である。彼は何より、こどもたちが大好きである。

青春から壮年への充実した時間に、この教師詩人は、けやきの木にこどもたちひとりひとりの豊かな成長を見

根があつて 大きい幹があつて

枝は おんなじようなたしかさで

小学生の一群が

晴天に指をひろげるように

はたらく者の腕が五月の空を支えるように

その枝々に主従はなく

太陽は 平等にいたただくのだと

五月の空を支え

五月の晴天にひろがる

しげつて風にそよぐ その葉のみどりも

その葉のやさしさも

太陽のかけにくもるものはない

(作品「けやき」全篇)

つめて、同時にそこにこれからの社会の理想をだぶらせて、静かに熱く、応援するのである。

そのような心は自然とこどもたちにも伝わるのだろう。別の作品ではけやきにまつわるこどもたちとの交流が描かれる。

クレヨンと画版をもたせて おれは

このけやきの木の下に子どもたちをつれてきた

——中略——

子どもたちは いっせいかきはじめ

まず 幹を がつしりとふとく

幹は自由に うでをのびし

冬の空をつかむ

ふくらんだ芽を赤くぬる子ども

枝先にわかみどりの芽をふかせる子ども

おれには気づかなかつた根を発見して

ごつい根っこをぬっている子ども

おれはひとつひとつの絵がみんな気に入って  
教室のかべいっぱい  
子どもたちのかいた  
けやきの絵をはった

(作品「けやきの絵」より抜粋)

こころのふるえ。教師「おれ」は、子どもたちの豊かな感性に驚き学び、胸を張って紹介しているのである。何という素朴な感動、何という何気なさであろう。この何気なさはそれでいて深い詩精神を含んでいる。

詩を読む喜びの一つに、現実の中にあるが現実に超える視野の、強度の発見的展開がある。それは対象へのより積極的な意欲関心がなければ書けないものだ。夢を現実の中に引き寄せる激しい批評精神と愛情がなければ書けないものだ。

こどたちに学び、共に歩む彼自身が、けやきの樹なの

である。

子どもたちの個別の姿が描かれた作品群は感動を生き生きと伝えるが、中でも作品「シンちゃん」には作者の人間学がこめられていて感銘深い。中学二年の「問題児」が主人公で、騒ぎを起こしては教師にしかられていられない。作者もその教師の一人である。シンちゃんがある日、小学六年生を相手に「サイミンジュツ」を実践している。他愛もない催眠術シーン。その後何気なく次の幾連かがある。

シンちゃんの目は ぼくを見て

「先生がいちゃ はずかしいな」と言うが

心の奥で ぼくはふるえている

「ぼくは ほんとうに シンちゃんを

だいじにして あげただろうか」

「シンちゃんは 大したもんだ」

と ぼくは かたをたたいた

シンちゃんは ぼくをちよつとにらみ  
それでも笑顔をみせて

「一年も練習をしたんです」

目がねの先生が やってきて

「目をつぶらせるなんて ひどいわ

人権ジュウリンだわよ やめなさいよ」

と こわごわどなる

シンちゃんは 目はきついが やさしく

「大丈夫です 精神に影響はあたえません」

シンちゃんは 人権をジュウリンされてきた

教師からも 親からさえ

ただテストの点だけで人間を評価する

資本主義のもとの教育そのものから

—— 中略 ——

シンちゃんは ふくしゅうのために

一年のあいだを サイミンジュツにかけた  
誰もできない サイミンジュツ  
それが シンちゃんにはできる

—— 中略 ——

シンちゃんのすばらしい人生は  
こつからはじまるんだ

(作品「シンちゃん」より抜粋)

前半の流れからふとそこですべてが変わる三行、  
〈心の奥で ぼくはふるえている〉《ぼくは ほんとう  
に シンちゃんを／だいじにして あげただろうか》。

ここに読む者の胸にぐっとくるものがある。何気ない表現で、これだけ取り出すと特に詩的なフレーズではないが、「問題児」のことが書かれた後の展開の、この連のまさにこの位置に置かれたこの言葉には、この詩全体の感動が凝縮されているのである。

それが詩の言葉というものであろう。前後の組み合わせと展開の中で、ぐっとそこに集約され、そこに独自の発見がある「行」と「連」。

その後の展開には作者の人間スケールがよく表れている。何ということもない普通の言葉なのに、こころの奥に灯る詩情がある。あえて自分を「愚かな教師」「抑圧者」として描いてまで、こどもの中の光を刻印する。高次のダンディズムと言えるかもしれない。

こんな教師は、現在ならばがんじがらめの教育制度の下でつぶされてしまうかもしれない。戦後民主主義運動が教育の現場に健在だった時代だからこそそのシーンかもしれない。しかし、だからこそ、現代の教育現場で、この詩は夢と勇気を与えてくれるのではなからうか。

悲惨さを描くだけが現代詩ではない。山岡氏の詩のように、人間関係が希薄な現代社会でこそ、こころとこころの微妙なふれあいを描いた作品はもうひとつの現代詩

品「あたらしい憲法のはなし」。軍国主義から一八〇度変わった平和憲法を説く〈昭和二十二年八月二日発行〉の文部省「あたらしい憲法のはなし」。冒頭と中間にそのまま引用される。戦争を放棄し、世界の人人々と仲良くし、争いも武力で解決しないで話し合う、ということを知りやすく説明するものだ。思わずこれは平和を願う二十一世紀の活動家の言葉かと思いきや、半世紀前の政府公式文書なのである。引用の仕方そのものに仕掛けがあり、風刺がある。

そして、教師詩人は、政府が憲法をごまかしてすすめてきた軍備や戦争法や侵略戦争美化教科書合格、教育現場での日の丸・君が代おしつけなどを淡々と振り返りながら、ぼつりとつぶやく。

〈文部省も変わったものだ〉

痛烈だ。「伝統」を叫ぶ保守政治家たちが実は自らの戦後社会の伝統である平和憲法に違反しているのである。詩の最後に作者はこう言う。〈あたらしい憲法のはなし〉を／ぼくはいま改めて読んだ。発表された二〇〇三年から七年が経過した現在、さらに強い説得力

として光っているのではなからうか。

では、柔らかいこの観察力はどこから生まれたのだらうか。もちろん、山岡氏個人のもって生まれた個性もあるだろう。だが、見逃してならないのは、幼かった頃の彼自身の価値観を一八〇度変えた戦争体験である。私には、彼の人間を見る目の柔軟さ、広さ、大きさは、戦前・戦後を多感な少年時代にじかにまたいでいるということにも多少なりとも起因しているのではないかと思えてならない。

「周りが言うから」とか「権力や権威的存在が言うから」という精神構造がいかに危険なものかというのを肌で知っているから、彼は自らの目で見えて考える。こどもたちに対しても、社会の諸問題に対しても。謙虚なこの人は自分では「迷ってばかりのダメな歩み」を演出する傾向があるが、彼のような人こそ、高潔な本当の活動家だと私は思う。

二〇〇三年刊の第十詩集『孫娘とタンポポ』所収の作

で光る。

二〇〇八年刊の第十二詩集『笑生ちゃん』所収の作品「学徒動員のこと」では、戦争末期の学徒動員のひとコマがリアルである。その中に軍国主義教育の異常な「歴史」観が記録されている。

〈ジョウモン ヤヨイ時代はなく  
地球よりも古い伝統を持つニッポン〉

強烈な風刺である。地球規模の思考が求められる現代の若い人々にはオカルトのように感じられるかもしれない戦前の「歴史学習」である。こどもたちは「神の国」に洗脳されていたのである。

山岡氏の諸詩集には、こどもの頃軍国少年であったことと、戦後歴史の真実を知った時の大きな驚き、民主主義的な社会意識の芽生え、学習と実体験、朝鮮戦争による平和憲法の危機と平和の大切さの痛感、教育現場、関わってきた地域や全国の諸運動で得た社会的自覚、などが生き生きと描かれている。そして、たくさんの反戦平

和の詩。

現代社会の資料的価値もある作品群なのだが、それらに正直に述べられる心情は、多くの庶民大衆が体験したように、さまざまに揺れ動く。その矛盾を含んだ問いかけなども文学ならではだろう。その中で、もっとも大切な人間の尊厳や、ひとりひとりの命を、世界各地の情勢ともからめて、ずつとまっすぐに詩で語ってきたのがこの詩人なのである。

大切な息子さんのおひとりを自死で失った思いや、かわいなお孫さんのおひとりを事故で失った思いなどは、読むのが辛い、大切な普遍性をもつ。

最愛の妻との最期の日々のコミュニケーションには目がしらが熱くなる。

好奇心旺盛な少年期から、血気盛んな青年期・壮年期を経て、愛すべきおじいちゃんの顔も見せる達観の現在まで、こうして山岡和範氏は自ら生き続けながら、さまざまな存在に詩的な光を当てて、世界と日本の良心と連帯してきた。

山岡氏の肩を抱くだろうと私は想像するのだ。

「山岡くん、ぼくが志半ばで死ななければならなかった平和の思いを、君はよくずつと語り続けてくれました。頭が下がるよ。ぼくは『にんげんをかえせ』と詩に書いたが、君はそれをその後の社会で実践し、まわりの人々に『にんげんをかえす』役割を担ったのだ。ありがとう。」

そして、当時峠三吉の周りに集まったグループで年少の存在だった山岡氏を関東上京後も詩世界へといざなつた詩人・増岡敏和氏はいまも健在だが、いまこの詩選集を読んできつと深く喜んでくれるであろう。

いま世界は長年の粘り強い世論と運動の力で「核のない世界」への機運が高まっている。また、沖縄の米軍基地問題は正念場を迎えている。危険な改憲の策動もある。こどもをめぐる問題は深刻であり、社会の中このころの闇と、大人社会でもコミュニケーションの危機が懸念されている。

そうしたいま、山岡氏のこの詩選集が刻んだものを、

人間臭い、生き生きとしたその作品世界は、「うさぎとかめ」のかめをも連想させる親しみやすい着実さで、殺伐とした現代社会において特にいま、輝いて見える。

こうして時代の詩人は、五月の新緑に伸びやかに息づく「けやき」となって、人と人のところをつなぐ、つまりは「にんげんをかえす」詩を書き、実践してきた。度々出てくるけやきの樹は、彼の信念、詩的精神、まなざしのみずみずしさ、などの象徴であろう。

山岡和範氏はヒロシマ原爆時、県内の小さな島にいた少年であったが、その後友だちが被爆していることを知り、親戚にもそのような犠牲者がいて、さらには影響を受けた恩師・峠三吉の原爆を見つめた生き方に共感したこともあって、どこかに「自分は若い頃ヒロシマにしっかりと向き合わなかった」という自責の念を持ち続けたようだ。詩作品にもそのニュアンスが時々出てくる。

だが、もし今回のこの詩選集を今は亡き詩人・峠三吉が読んだならば、きつとこんな風に言つて懐かしそうに

にんげんとして、読み返していきたいものだ。

山岡さん、いい詩をありがとう。

エッセイに書かれているように、山岡さんは、広島市から僅か数十キロ離れた、大崎上島で生まれている。そして原爆投下から八ヶ月後、広島師範学校に入學し、以後六年間、広島で寮生活・下宿生活を続けている。

注目しなければならぬのは、峠三吉との出会いであり、「われらの詩」への参加であろう。週に一、二回、峠の住む「平和アパート」を訪ね、増岡敏和さんが中国山地の自宅から担いでくる白米を、和子夫人に炊いてもらって詩人仲間でたべる。この話は、山岡・増岡両氏ともに親しい私にとって、とても身近に感じられるエピソードである。

山岡さんの第一詩集『貧者の求愛』は一九五六年に出版されている。そこに収録されている「商店街にて」には、戦後の広島が活写されている。「己斐の商店街を歩く。肉屋、洋服、うどん、酒。つづく軒並みは桃の花さかり。ぼくは背のびして歩こうとするが、胸がなまりを

詰めこまれたように重い。恋人がいない。ぼくの女性をアメリカ人が連れてあるく。」爆心地からは遠い己斐だから、商店には、そこその品も売られているようだけれど、背のびして歩こうとする山岡さんには恋人がいない。フィクションかも知れないが、「ぼくの女性をアメリカ人が連れてあるく」のである。それは日本のどこの街にもある、占領下の風景であった。(たぶん正確には、アメリカ人ではなくアメリカ兵だったと思うけれど

……)胸が重いのは当然かも知れない。

見逃してはならないのは、その後に書かれた山岡さんの回想である。「フト、ヒロシマ二原子爆弾ガオチタトキ、コノ町ヘミナニゲテキタトイウ話ヲオモッタ。」と書き、被爆者の当時の様子をカタカナ書きで綴っている。最後は「マルデ／巢ヲコワサレタ／アリノヨウニ／ニゲテ／ウジムシノヨウニ／ゾロゾロ／アツマツテクル」と。実にリアルな臨場感あふれる筆致で描かれている。

原爆という途方もなく残忍なものに故郷を焼かれ、占領され、その占領軍が「ぼくの女」を抱いて歩く。山岡さんの胸のなまりは、どれほど重いものだったろうか。

『貧者の求愛』と題するように、この詩集には求愛と失恋の体験が書かれている。

「出発」という詩には、十年前失恋したその女性に見送られ、旅立つ日のことが書かれている。「へつくさいどぶ河にそって二人はあるいた／にぎりあった手の中にふるさどがあった」たぶんこうして山岡さんは東京へ出発したのだ。にぎりあった手はふるさとであり、ふるさととは、人と人とのそういう絆の中に存在している。この詩集で異彩を放つのは「愛情のバクダンのなる木」ではないだろうか。「あなたのうんこやしっこをかき／ピヤンピヤンとうたう音楽をききながら／育ててやったら何とすばらしいことだろう」と夢想する山岡さんに、この恋はワケあって実らなかつたようである。理由は彼我の貧富の差にあった。

切なく語られる山岡さんの〈求愛〉は成就していない。戦争によって壊され、貧富の差によって阻まれるのだ。以後、この体験は、終生山岡さんの「愛情のバクダン」となり抱えられていく。

第二詩集『げやきの絵』に「握手」という詩が載せら

れている。「ただいっかいきりの／恋びととの握手だけを十年も／だいに胸にしまいこんでいたぼくに／突然握手を要求してきたのは／労働者の子どもだ」と書き、「ぼくがその治次と握手したとき／かえりかかった子どもたちは／つぎつぎにもどってきた／〈先生 握手〉／〈あたいま〉〈ぼくも〉〈おいらもだ〉／子どもたちは門の前で／ちいさな手の列をつくった」と書かれている。間に、教材社がムチを配る二連が挟まっているのであるが、〈先生 握手しよう！ ムチはいやだよ〉と労働者の子どもも治次が戻ってくるシーンがある。

十年間、ひっそりと抱え続けて来た「愛情のバクダンの炸裂する瞬間である。山岡さんはクラスの児童たちと再び温かい絆を結び、「福雄くんのこと」や「シンちゃん」を書く。「シンちゃん」は、馬鹿にされてきたシンちゃんが、催眠術を使うことで、クラスの仲間だけでなく、先生にも一目置かせる話である。山岡さんはこの詩の最後に「人権をジュウリンするものへの／いかりをこめたほんものの学習を／苦しめてまっとうに／いまからはじめるんだ」とその日の決意を書いている。

表題が『けやきの絵』とされた第二詩集には「けやき」「けやきの絵」と、どちらもけやきを主題にした作品がある。それは、単に校庭にけやきがあったからというのではなく、主従なく晴天に指をひろげるその樹に、生きる姿の理想を感じ、象徴として描いたのだと私は思う。

この詩集にも、第三詩集にも、原爆資料館の詩が収録されている。原爆の傷痕を、被爆の街にも被爆者の皮膚にも、日常的に見て来た山岡さんに、資料館の資料はどう映り、どのように描かれているのだろうか。

第二詩集に収録の「原爆資料館にて」で「古銅貨は土とかたまり／ひんまがって抱きあった／サイダーびんとおなじように／女も／男も／子どもたちまで／みんな抱きあったまま／黒こげのかたまりになって／死んだ」というフレーズに出会った。「そうか！ 振れて抱きあっているのは、山岡さんにとって、サイダー瓶なんかじゃなかったのだ。」資料としての展示物が、まず一番に飛びこんでくる私たちと、資料を飛び超えて被爆の実相の方が飛びこんでくる、被爆者ないしはその関係者との認識の違い。——私は絶句してしまった。

ようになった」が光る。

山岡さんは誠実すぎるほど誠実に、自身の内面の弱さをさらけ出して書き、常に成長の糧にする人である。

第四詩集『絵になる風景』この表題作もけやきを主題に書かれている。

山岡さんは一九五二年三月から、実は既に東京に出て来ていて、第一詩集はその四年後の刊行である。第二・第四詩集ともにけやきの作品を表題にしているのは、広島と違って関東にはけやきが多いこともあるが、「それでもぼくは／けやきのなかに生き方を探している」とするこの人の、アイデンティティによるものである。

この詩集には「子どものころの話」という詩が書かれているが、同じ話がすこし形を変え、第九詩集でも「はじめ」に書かれている。本人にとってよほど悔しい出来事だったのだろう。私には、山岡さんの成長過程を物語る記念碑のように思える。山岡和範という詩人のやさしさ、正直さ、忍耐力。日頃おとなしいが風貌に秘められた闘志。——現在まで一貫して〈平和〉〈愛〉を求めている詩が書き続けられたのは、この山岡さんの持ち前の資質

第三詩集に収録された「原爆資料館」の方にも、「わたしにとって／被爆当時の広島を廃墟も／被爆者の写真も／『写真』であった」という重要なフレーズがあり、山岡さんは「写真」にはなく、骨のままの被爆者自身から訴えかけられ、追いかけられ続けているのだと、ようやく悟った。

同じ詩集の別の詩「被爆者」の最後に「でこぼこになった顔のへこみに／桃のかんづめを おそろおそろ／押し込むようにして食べさせていた」という、なんともリアルなまなましい表現があるのだが、山岡さんは、その被爆者もかんづめの桃も見ていて、資料館では（資料でも写真でもなく）その人々が、生身で直にたち現れてくるのだ、と私は思う。

第三詩集は『教師の詩』である。教育現場が教師の側から問い直されている。集中、「おかゆばら先生といぬむり先生と代用教員」は、当時の教員採用の実情も何となく見えて来て、含蓄の作品に仕上がっている。そしてその詩の最終四行、「ぼくらが軽蔑したもののなかに／大切なことが／かくされていたのではないかと／考える

によるのだと、私はひそかに思うのである。

ところで、第四詩集で衝撃を受けたのが「木の芽への思い」だ。「がんばって生きていた長男が逝って／心に日がさしてこなくなつて／庭の木をばつさり切った」。親の気持ち、同じように長男の自殺を体験した私には刺すように解る。それは同情されて済むようなものではなく決してないのだ。新しいみどりの芽を否定も肯定もなく見ている詩人の視線に、私も黙ったままそっと寄り添っていた気がする。

第五詩集『わが家の庭』では、「庭の母子草」としてその情景が引き継がれる。「この春咲かなかった母子草が／秋になつて芽を出し／中古車のまわりに／なきわめいた涙のあとのように／黄色い粒の花が細くしよぼくれている／おまえをわすれてはいないが／生きているものは／どんなに日がささないときでも／生きなければならぬ／おまえは生きていればよかったのだ／おまえは墓の下からでなく／結婚式からもどつてくる／新婚旅行からもどつてくる／おまえがいるときの／久しぶりに家族がそろつたときの／夕ごはんのにぎやかな風景」

「おまえは生きていけばよかったのだ」私も心からそうだと思ふ。墓の下からでなく結婚式から、新婚旅行から、戻って来て欲しいのだ。三周忌を過ぎてても、それが子どもに死なれた親のもつ気持ちだ。年間三万人を超す自殺者王国。この国の人に、この詩はもつと読まれなければ……と私は願う。

第七詩集『八月の幻覚』には、知覧、テニアン、サイパン、沖繩など、戦争で散った人とその戦跡が書かれている。ほとんど全篇鎮魂の詩であり平和への希求である。

「知覧」は、知覧特攻平和会館を訪れて書いた詩である。今西修という特攻隊員の遺書を紹介している。そして詩の冒頭にも最後にも「九州は台風による杉の倒木がそのままになっていた」というフレーズが配されている。美保子さん宛の遺書について「美保子さんはほんとうに妹だったのだろうか」と山岡さんは書いている。私は思う。特攻機に二つぶら下げられた人形の、一つは間違いない恋人だったろうと。

嵐も、嵐で倒れたものも、まだ終わってはいないのだ。

第八詩集『日陰に咲く』にはしつとりとした抒情詩が第十詩集『孫娘とタンポポ』には、アフガンやイラクでの戦争、そこで使われた劣化ウランやクラスター爆弾が書かれている。山岡さんの孫娘とダブって、戦場の少女も見えてくる。表題の「孫娘とタンポポ」という作品を、以前から私は山岡和範の代表作と思って来た。「戦争か平和への道か／何にも知らない孫娘は／やさしい親に未来をあずけて／まるく開いたタンポポの／わた毛を吹いて／空に向かつて飛ばしています」この情景こそが平和への希求であり、未来への希望である。山岡さんが終生願ひ続けて来た「愛のバクダン」なのだ、私には思える。

第十一詩集は『スイちゃんの対話』と題されて、可愛い孫娘との電話のやりとりが書かれているが、実は山岡さんの連れあいの、入院から死。納骨や遺影のことが書かれている。詩集『日陰に咲く』の「初恋のひと」のところで「いまの連れあいは／あまり美人でないが／かわいいいところがあって／結婚したのは／おたがいの信頼感からだ」と書く連れあいの詩である。お風呂に入ったまま立ち上れないでいた——というのが発端で、「ひ

多い。

とりわけ「初恋のひと」にある、山岡さんの純情とその誠実な心根に絆された。これこそ山岡詩の原点であり、この詩人の人柄そのものなのである。

第九詩集では、題名ともなっている「皆既月食」に、再度息子さんの自死の姿が描かれている。以前の作品と違いリアルに出来事が回想されていく。——二十年ほど前の皆既日食の日のこととして——

「家に着いて一階の部屋を開けると／健康ぶらさがり器に縄とびの縄を結び／中学のときの工作品の台に乗って／息子は自らの命を絶っていたのだ」と、ご息子の最期の様子が書かれている。遺書には「すみませんおとうさんおかあさんつかれました」と書かれていたという。どんな気持ちだったろうか。

「皆既月食の時間は一時間四十七分と／翌日の新聞は報じていたが／ぼくにとつては耐えがたい時間だった」悲しいとか切ないとか主観的叙述はひとつもないが、「東側の方から月は光りはじめていた」という終行に、生きることへの希望がしつかりと語られている。

とりごと」「会話」「病院の帰りに」「納骨」「彼女の遺影」、そして夢という形で山岡さんが妻延子さんの死を予感した「へんな夢」の六篇が収録されている。とりわけ、「へんな夢」には、明幽の境目に佇つ延子さんと、白装束を着た延子さんを見ても、なお生きていることを確かめようとする山岡さんの深層の葛藤が、実に美しく形象化されている。この数篇だけでご夫妻がどんなに深い信頼で結ばれていたのかが解る気がする。

第十二詩集『笑生ちゃん』は、二〇〇八年に出版されたまだ新しい詩集である。「あたらしい浦島のはなし」という長篇に、ますます詩想を深め、バイタリティあふれる詩人山岡和範の現在を見ることができた。この長篇には山岡さんの生きて来た時代が余すことなく語られている。そして最後に置かれた四行が実に山岡さんらしく美しい。そして初恋のひとは今でも山岡さんと握手したままのようではほえましい。

あと、「未収録詩篇」に収録されている『原爆詩集』紹介」に衝撃を受けた。現代詩の手法を超えた形で、峠三吉の業績を描く、実にスケールの大きい作品である。

こういう仕事は、現代詩の〈裾野を拡げる〉意味でも〈現代詩に新しい可能性を生む〉という観点でも、また〈戦後詩の歴史を刻む〉原点としても、極めて貴重な作品と思う。

山岡和範という先輩詩人に、ひとりの読者として「こんなふうにしたよ。」と下手でも私の感想文が差し出せるのは嬉しい。

思いのたけを書いた後で、山岡和範という詩人が「原爆詩」の原点「平和アパート」で詩を書き始め、今もその先頭に立っていることを、極めて貴重なことと思いはじめた。

#### 詩碑の前で (部分)

舞台にあらわれた和子夫人を見ると

客席にいたわたしは

舞台にとびあがって行きそうになりました

あとで楽屋にいつて和子夫人の笑顔に会い

増岡さんとも再会をよろこび

劇団の人たちと語りあったあと

峠三吉の詩的精神を夏空に問い続ける人

『山岡和範詩選集一四〇篇』に寄せて

鈴木比佐雄

1

山岡和範さんは、二十歳の頃に峠三吉から原爆の悲劇を伝える志を手渡された詩人だ。私たちにとって峠三吉は歴史上の詩人なのだが、山岡さんにとっては兄であり父でもあるような存在であった。一九四六年四月に十五歳の山岡さんは広島師範学校に入学するために初めて広島に入り、上京するまで六年間を過ごした。そこで見た光景をエッセイ「ヒロシマ・そして戦後―峠三吉に出会ったころ」で次のように記している。「広島駅を出ると駅前にはバラックの闇市でにぎわっていました。途中、比治山手前の的場には映画館もあり、広島は焼野原で何ひとつないという話とはちがっているように思いました。木も草も芽を出していました。」この記述からも分かるように山岡さんは、自らの先人観を排除して率直に物事を

赤羽のあたりで三人で額を寄せ合い  
夜明けまで飲み語りました

人生を苦しみ生きている和子夫人に

何もしてあげることができませんでした

峠さん

あなたの顔がうかびます

「人間を返せ」の叫びが胸に高まります

いま自衛隊海外派兵のために憲法を改悪しようと

政治・経済・教育・文化などを

戦前に戻そうという影がのしかがっています

峠さんに何もしてあげられませんでした

峠さんの炎のような熱情とやさしさにつながって

わたしはなにかまたちといっしょに

「人間を返せ」と叫び平和の運動に

足をふんばっていいこうと思います

『八月の幻覚』より

どうかいつまでも書き続けて欲しい。永遠の初恋のひとつのこと、平和への希求も――。

見詰めると同時に、自分の内面を検証しながら考えていこうとするタイプの詩人だ。山岡さんは朝鮮戦争が起きた一九五〇年の「われらの詩」八月号の平和特集号に参加し、峠三吉の暮らす比治山近くにある「平和アパート」に仲間と週に一回か二回は通っていた。そこで学習や議論をしたりして、『原爆詩集』を書き編集する峠三吉に身近に接し、血を吐いていた峠三吉に輸血をした一人でもあった。一九五二年に東京の小学校に勤めるために上京した山岡さんは、手術の直前にも峠三吉と私信のやり取りを続けていたが、峠三吉は手術に失敗して亡くなってしまった。山岡さんは何とか東京の小学校に職を得て、一九五六年には第一詩集『貧者の求愛』を刊行した。その中に「少女」という詩がある。

少女

「先生

おつむに蝶々が

とまってるわ」

菜の花が咲いて  
花びらの黄色は  
みずみずしく  
少女の胸をとりまいてる

おかつばを  
春風にあてて  
につこりした  
輪郭の快活さ

少女は  
草履をもってきた  
あのやわらかい手で  
私の前にそろえた

畠にはいつて  
菜の花の  
においをかいだ

さんは峠三吉と出会う前に、その後に書いていく詩のスタイルの原型や詩的精神をすでに確立していたようにも思われる。その意味で言うと峠三吉から詩法においては影響を受けたわけではなかったろう。山岡さんの詩は、この世の過酷さや非情の中にもファンタジーにも似た人間愛の世界を発見しようとする詩的精神を感じさせてくれる。

山岡さんがそのような方法で初めから書くことができたのには、きっと訳があるに違いない。山岡さんは一九三一年に広島県大崎上島に生まれた。毒ガス兵器を製造していた大久野島の隣の島でもあり、みかんやタバコやサツマイモを栽培していた島だった。同級生の中には、学徒動員によって大久野島で働かされた仲間もいたが、その島での出来事は軍事機密で戦争中は決して情報漏れることはなかったという。山岡さんは当時を振り返り「軍国少年」で「日本は必ず勝つ、神風が吹くと信じて疑いませんでした。」と記している。十四歳の少年は軍国教育によって天皇のために死ぬことを当然のように思っていた。しかし終戦後に全く価値観が変わり、教育

この「少女」という詩は、広島師範学校時代に仲間と作った「二十代」という文芸誌に初めて掲載された詩だという。この創刊記念講演に峠三吉を招いた時に、山岡さんは峠三吉から直接に声を掛けられこの詩「少女」を高く評価され、「われらの詩」に参加しないかと誘われた。その意味でこの詩は山岡さんと峠三吉をつないだ記念すべき作品だったのだ。峠三吉もまた抒情性を根底に抱えた詩人であり、きつと峠三吉は山岡さんの詩にその豊かな抒情性と純粋に子供たちを愛する人間愛を感じ取っていたのだろう。山岡さんは二十歳の頃に教育実習で出会った少女の存在から、人間の尊厳を教えられたのではないか。原爆後の広島で暮らしながら、人間の尊厳を剥ぎ取られてしまつて忙しい大人たちの中でも、健気にまっすぐに生きようとしている子供たちの存在に、きつと救われるような思いを抱き、大切なことを教えられたのだろう。当たり前前の光景の素晴らしさを奇跡のように感じたからこそこの詩が記せたのだと考えられる。山岡

の力が純粋な子供たちに与える恐ろしさを痛感していったのだろう。それだけでなく山岡さんは自らもまた戦争に加担していたと厳しく戦争責任を直視していくのだ。私はその山岡さんの姿勢に事実を内面に問うていく人間としての誠実さと強さを感じたのだ。戦後の「荒地」の詩人たちが自ら戦争に加担したことを隠して上の世代の戦争責任を批判し、戦後詩の世界でポジションを得たような精神構造とは、山岡さんは無縁の詩人だった。その意味で山岡さんのような詩人こそが、もつと評価され読まれなくてはならないと考えている。

## 2

一九七七年に刊行した第三詩集『教師の詩』の中に「写真」という詩がある。この詩を読むと山岡さんが被爆の写真を見ることによって、実はその光景から、問われ始めてくる精神状態を真摯に伝えようとしていることが分かる。

じつと見ていると

写真が あのとまのように動いて

建物がくずれおち

どろどろに溶けている人間が

火あぶりにされる虫けらのように

うごきまわる

つたわってくる

異様なにおいとくずれる音と

人間のうめきがわたしを責める

## 影

石に焼きついた人間の影

その人は 何をしていたのだろう

労働者だったのか

学徒なのか

影だけを残している

さつと影だけを石に焼きつけた

その人の手は

どうなったのだろう

燃えた服が皮膚にべたつくのを

その手でおさえ

家族の名を呼びながら

しばらくは

歩いていたかも知れない

## 目

あの子どもの目は

こっちを見ている

被爆して治療をうけながら

痛そうな傷を見るのでなく

あの子どもの目は

じつと こっちを見ている

引き裂かれた口から

歯をむき出して

こっちを見ながら

じいっと動かないから

わたしの心は

たまらなくなる

山岡さんの原爆詩とは、写真の中の被爆者たちの破壊された姿から、決して眼を背けないで、その姿から発せられるうめき声や放心した眼差しを見聞き感じようとする。そして何もすることの出来ない自らを責め、「たまらなくなる」までその場に立ち続けようとす。すると

逆に建物とともに火あぶりにされた人、影だけを石に残して消え去った人、直接被爆して変わり果てた子どもたちなどから、生き残った自分たちが見られていることを感じ始める。その被爆者の眼差しから戦後に生き残った者たち、また戦後生まれの者たちもまた被爆者たちから

今も見られていて、戦争や平和の意味を問われていることを告げているのだろう。山岡さんは、被爆者や戦死者たちの無残に死んでいった姿を決して忘却しないために、

どうしたらいいかを読む者の想像力に訴えかけてくる詩法なのだ。私は奇をてらわずに淡々と語りかけてくる手法の方が原爆の意味を自らに問いかける思考のリズムに合うだろうと考える。日本人もアメリカ人もその他の核保有国の国民たちも、被爆者の悲劇から視線を逸らすことなく、決して使用してはならない核兵器などの大量破壊兵器を廃絶するためには、具体的にどうしたらいいかを自らに課すべきだと、山岡さんは静かに物語っているのだ。

## 3

一九九〇年に刊行された第五詩集『わが家の庭』の中には「ねぎを食った話」という詩がある。この詩は戦後の日本人への痛烈な批判を優しく語りかけくる忘れがたい作品だ。

## ねぎを食った話

なかまと一杯やってそば屋にいった／戦争と平和

についての議論のあと／若い青年がいった／「お  
やじさんはやさしいね／だれにもがまんぶよくて」

ぼくはそのことをきいて／やさしさについて考  
えた／この国の大臣のわがままに／がまんぶよく  
いかりをおさえ／やさしくなっている自分を見た

そばがはこばれてきて／そばをたっぷりつゆにつ  
けて／ぼくはすぐに食べはじめた／平和のために  
がんばってきた／四十年の時間を思いうかべて

四十年たたかかって／平和の力をのぼしてきたが／  
戦争の力もぐんとふえてきて／この国の大臣は大  
いばり／人間がぶたに見えたらしい

となりの国の民話に／人間がぶたに見えてしまっ  
て／人間が人間を食べる時代があったとある／ね  
ぎをうえてねぎを食べると／人間は人間に見えて  
くるという話だ

がまんしているうちに／ぼくもおこぼれの朝鮮を  
食べ／ベトナムのおこぼれで肥満体となり／アジ  
アに大ぐちをあげている大臣に／なんとなく似て  
きてはいないか

酒におかされながら／アジアのすべてがぎよう  
しゅくされている／そば屋のそばにせめてねぎを  
入れ／人間をぶたと見ることを見ましめ／ぼくは  
大ぐちを開けてそばを食べていた

この詩は、戦後の日本の高度経済成長にアジアの戦争  
の特質が何らかの形で寄与していたことを風刺している  
詩だ。自らもそれに加担して「人間がぶたに見えてしま  
う」欲望に満ちた存在に成り下がっているのではないか  
と自問している。四十年間、平和を考えて実践してきた  
山岡さんだが、それでも「アジアがぶたに見えにちが  
いない」とまで痛切に日本の大臣だけでなく自らさえも  
問い詰めていく。山岡さんは教師の組合活動をしていた

若い青年はいった／「おやじさんねぎを入れなよ」  
／ぼくは内心ぎくりとした／ねぎはあまりすきで  
はなかったが／いわれるままにねぎを入れた

ぼくはあらためて／四十年の時間を思いうかべて  
いた／ぼくは平和なくらしのために／どんなこと  
をしてきたのか／これからなにをしようとしてい  
るのか

四十年の時間を思いうかべると／この国の大臣は  
朝鮮を食べた／しばらくしてベトナムを食べた／  
そしていまアメリカしりめに／アジアに大ぐちを  
開けている

その大ぐち がたりと開くと／「東洋平和」のた  
めといつわったかつての／「大東亜共栄圏」の形  
になったので／この国の大臣は再び／アジアがぶ  
たに見えにちがいない

が、その組合・政治活動や経済活動を見る視線には、人  
間を敵味方に分けない柔らかい思考が息づいていたよう  
だ。何のための組織であり、社会であり、国家であるの  
かをドグマにとらわれずにひたすら見詰めようとしてい  
る。日本人は戦争の悲劇や戦争責任から眼を背けて、今  
も「アジアがぶたに見え」ているから、いつまでたつて  
もアジアの民衆に敬意をもたれないのだとさりげなく山  
岡さんから告げられている気がする。このことはきつと  
峠三吉の精神である。「人間を返せ」を山岡さんは心底か  
ら担って血肉としていて、自らの生きる思想にしている  
からなのだと私には考えられる。山岡さんは「人間を返  
せ」を被爆者だけでなく、人間を手段としてしまうこと  
に対する告発として広げようとしているのだろう。その  
意味では峠三吉の詩的精神を未来に生かし続ける詩人だ  
であり、私たちは多くを学ぶべきである。

4

二〇一〇年の春先に詩集『今日という日』を刊行した  
ばかりの北村愛子さんが、コールサック社に遊びにやっ

てきた。その際に北村愛子さんが同じ詩誌「梢」の仲間であった山岡和範さんの詩集を読んでほしいと八冊もの詩集を持参してくれた。北村さんと山岡さんとは、赤木健介さんが主宰した一九六〇年代の「起点」の頃から一緒に詩誌運動をしてきた詩友だ。北村さんの願いは、峠三吉の「われらの詩」に増岡敏和さんと一緒に係わっていた山岡さんの存在を知って欲しいとのことだった。また『原爆詩一八一人集』や『大空襲三一〇人詩集』に詩を収録させるべき詩人だったとも言われた。私には北村さんの山岡さんに対する敬意と友情がとても清々しいと感じられた。私は「梢」などでは山岡さんの詩を読んではいなかったが、その全体像を知ることにはなかったが、多くの詩集を通読することによってその価値がおぼろげに分かってきた。そこで山岡さんに連絡を取り、私の読んでいない残りの四冊や未収録詩篇も送ってもらい全貌を知ることができた。峠三吉の詩的精神を引き継ぐ詩人として私は山岡さんを多くの人びとに広めたいと考えて、コールサック詩文庫シリーズに入ってもらうことを提案した。山岡さんには詩篇には原爆詩の他に、子どもやそ

の親御さんの生き方に尊敬を感じて書き記した教師の詩篇がある。またケヤキや庭の草花など自然の命を見詰めた詩群もある。また組合運動などを通して社会を見詰め、息子さんの自殺やお孫さんの交通事故死や連れ合いを亡くされたことなど家族の死を悼む鎮魂詩など多数のテーマで書かれた詩篇もある。それらの全貌を読んで欲しいと願ったのだ。山岡さんも賛同してくれてこの『山岡和範詩選集一四〇篇』が実現することになった。日本の原爆詩運動を開始した峠三吉の実像を明らかにする意味でも、その傍らにいた山岡さんや増岡敏和さんの詩業は、もっと評価されて明らかにされなければならないと考え

る。

二〇〇六年に刊行された第十一詩集『スイちゃんの対話』の「大久野島」には、山岡さんにしか書けないだろう日本人が背負い続けなければならない戦争責任が今も重たく問い続けられている。

#### 大久野島

大久野島に国民休暇村ができたとき  
妹が大きなサザエをたくさん採ってきた  
大久野島には戦争中毒ガスの工場があった  
日本軍が中国で毒ガス弾を使用し  
中国に遺棄された毒ガス弾は  
少なくとも七十万発が残っているという  
「満州事変」から七十三年  
(ぼくも七十三歳になったばかりだ)  
戦後五十九年を過ぎた今も  
日本軍の毒ガス戦争被害者が出ている  
と九月十八日の「しんぶん赤旗」にあった  
ぼくがふるさとの大崎上島に帰るとき  
三原港を出て最初の港が大久野島だが  
近くの本州忠海港からの便もある  
妹が大きなサザエを採ってきたのは  
三十年余も昔のことだがその後  
ぼくが連れ合いと大久野島に行ったとき  
毒ガス館は休みで近くを散歩したが

島のおちこちにうさが出没していた  
忠海中学に進学した島の同級生S君が  
勤労学徒動員で大久野島に行っていた  
と聞いたのもそのころのことであった  
子ども二人と孫二人の二家族を連れて  
この夏久しぶりにふるさとの大崎上島へ帰った  
神峰(四五〇米)に登ると空は青く  
展望台から見ると左は中国山脈と竹原港  
右には愛媛県の大三島と四国山脈が  
前方の東には小さな大久野島がある  
戦争中は地図に記すことを許されなかった  
日本軍の毒ガス生産工場だった大久野島  
平和の島になって海水浴にもよいのだが  
毒ガスの匂いをかぐうさぎは  
島のおちこちに今も出没している

毒ガスを中国に遺棄した日本を  
中国の人たちは許すことができるだろうか

広島・長崎に原爆を投下したアメリカを  
ぼくらの日本は許してよいのだろうか  
戦後アメリカは日本の七三一部隊による  
毒ガスや細菌の史料を持ち去り  
原爆被害者をモルモットにして  
原子爆弾の効果を調査し続けている  
そのアメリカと軍事同盟を続け  
日本を軍事国家にする政治を許してはならない  
かつて毒ガスを生産した小さな島  
大久野島の海は湖のように静かだった

山岡さんの詩行はいつも淡々と描かれているが、私には山岡さんが胸を切り裂くように書き記しているように感じられる。故郷の島の山野や海はきつと自らの肉体的ように感じられるはずだ。その故郷の島には毒ガス兵器工場がいつのまにか作られて生産されて、中国で使用されただけでなく、未使用の膨大な毒ガス兵器が未だ遺棄されて中国人に被害を与えている。その痛みが行間から

まっ赤にふくらんだ顔は  
割られて裂けたさくろの果実

夾竹桃の赤い花が咲いて  
空に白い骨の花が咲く夢を見ました

溢れ出てくる詩だと思われる。だからこそ戦争と平和を問う山岡さんの問いが読むものに、戦争と平和の意味を根源的に突きつけてくるのだ。故郷の島々の存在そのものが、日本人が起こした戦争責任の意味を永遠に問い続けるだろう。山岡さんの粘り強い誠実な精神力がこの重厚な詩篇を生み出したのだと思われる。このような詩群の数々を戦争責任の意味を問い続ける多くの人びとに読んで欲しいと願っている。最後に最近書かれた未収録詩篇の詩「夾竹桃」を引用したい。短い詩だが山岡さんの被爆者たちへの鎮魂の深い思いが、広島の夏空に花咲くように感じられた。

#### 夾竹桃

赤い夾竹桃の花が咲くと  
広島のを思います

ピカに焼かれた火傷は  
ちぢれて赤い百日紅の花